

スタッドのある風景IV

マティアス・ルー『スパイクを履いたソクラテス』を読む¹

澤田 哲生

今日のフランスでは、サッカーをはじめとするスポーツが、学問の対象として認められている。1970年代後半から80年代の前半にかけて、人類学者たちは、スポーツ人類学という分野を創設した。上流階級の趣味や娯楽という、英国流のスポーツの考え方に対して、この分野では、スポーツにたずさわる市井の人々の行動と思考が重点的に分析される。エクサン・プロヴァンス大学のクリスチャン・ブロンベルジェは、この分野の第一人者といえる²。

近年では、人類学にとどまらず、他の様々な分野の研究者も、それぞれの知見から、スポーツを論じている。高等師範学校の卒業生で、哲学の教授資格を持ち、現在、高校の哲学クラスで教鞭を取る、マティアス・ルー(35歳)も、サッカーというスポーツに関心を持つ哲学者の一人である。彼の関心の深さと独創性は、2010年に公刊され、同年の『エクスプレス』紙エッセー賞に輝いた著書、『スパイクを履いたソクラテス』から窺い知ることができる。

著者は、「前書き」のなかで、サッカーと哲学に共通の要素を指摘している。キーワードは、「遊び(jeu)」である。「遊びというかぎりにおいて、スポーツ一般、とりわけサッカーは、極めて両面的な現実の領域を思考活動に提供してくれる。この領域の輪郭は、ぼんやりとしており、私たちが暗黙に行っている概念上の分類を混乱させ、私たちが、自分のことを問うよう促すのだ」(p. 8)。ルーが記すには、サッカーという競技は、一種の「遊び」であり、この遊びは日常生活のしがらみや、固定観念の外部へと、見る者を誘う。ルーが提示する例は、1998年フランス・ワールドカップのイランとアメリカの試合である(p. 9)。選手たちは、両国の悪化した関係に囚われることなく、ピッチ上でフェアプレイの精神に貫かれたゲームを実現した。サッカーという「遊び」が、たとえ一瞬であるにしても、国家間のあるべき姿を提示したのである。ルーによると、スポーツのこうした側面は、哲

学の領域では、「(ソクラテス流の)皮肉(eironeia)」(p. 11)という概念に対応する。ソクラテスは、無知の知者を演じることで、対話者の思考と論理の矛盾を、対話者の内側から露見させる。対話者がこれまで自明だと思っていた事柄が、ソクラテスの「皮肉」に満ち溢れた物言い、もしくは「戯れ(jeu)」を通じて、自ずから問い直すべき対象に変化する。「自明なことがら」(p. 11)に新たな展開が与えられる地点で、ルーはスポーツと哲学の近似値を計測しているのである。

この書物は、2006年ドイツ・ワールドカップ決勝、フランス対イタリアの試合を題材としている。ルーは、試合のターニング・ポイント毎に章を構成し、それぞれの出来事を哲学的な視点から論じている。とりわけ、秀抜な個所は、前半7分のフランスの先制点に関する分析である(第2, 3章)。前半6分、フランス・チームのサイドハーフ、フローラン・マルダがペナルティエリア内で、マルコ・マテラッツィに引っかけられ、転倒する。主審のオラシオ・エリソンドは、ペナルティ・キック(PK)の判定を下した。「アルプスの両側[フランスとイタリア]で、[ファウルのシーンの]映像に応じて、諸々の意見が生まれた」(p. 31)。リピー映像は、いくつものアングルから、同じシーンを繰り返し映し出す。ある角度から見れば、ファウルに異論の余地はなく、別の角度から見れば、マテラッツィはマルダに軽く触れただけで、大よそファウルとは判定しがたい。視覚と印象は、場に応じて、変化する。ルーは、この現象を「知覚」という行為から説明する。「[...]任意のプレイという行為を知覚する上で、異なる感覚を一つの全体に統一し、プレイという行為をそのものとして規定する精神の活動が必要となる[...]」。知覚すること、それは、判断することなのだ。『ファウル』とか『ゴール』というものの実体は、当の実体を知覚する私の行為に先立ちはしない」(p. 35)。多様で、雑多な諸感覚を統一し、そこから対象に判断を下す作用が、知覚の特徴である。判

断の素材は、雑多な感覚であり、これらの感覚は、「その時の私たちの関心」(p. 36)という極めて主観的な要素を含んでいる。感覚的な素材が不安定である以上、知覚行為も、同じく不安定となる。そうであるから、フランス側は、自らに都合の良い立ち位置からPKを主張し、イタリア側は、誤審を主張する。

ルーは、この知覚行為の極めて人間的な側面が、サッカーというゲーム(jeu)の魅力の構成要素であると考え。彼は、このことを、近年盛んに議論されているビデオ判定の問題を例に挙げながら、説明している。「ビデオ判定に賛同する者たちの無邪気な意見は、問題となる行為を厳密に知覚する作業が、問題の解決に結びつくことを前提としている」(p. 37)。三人(主審と副審二人)の6つの眼よりも、数十台のカメラがいくつもの角度から撮影した映像を何度も再生する方が、知覚上の客観性は、確かに、高まるはずである。しかし、「純粋な知覚行為は存在せず」(p. 35)、「完璧なイメージ、全視点を抱合する一つの視点は、論理的に不可能である」(p. 37)。正確な視点、完全な知覚を求め、技術に頼るならば、人間の知覚行為そのものが否定されてしまう。感覚の「誤謬」、そこから生まれる「幻想」は、論理的には誤認と判断されるが(p. 38)、そのものとしては間違いではなく、それどころか、ゲームに欠かせない要素となることを、ルーは主張するのである。

前半、7分、このファウルで得たPKを、ジダンが決め、フランスに先制点をもたらす。ジダンは、「パネンカ」と呼ばれるシュートでゴールを決めた。パネンカは、1970-80年代にチェコスロヴァキア代表で活躍した選手である。1976年の欧州選手権決勝の対西ドイツ戦で、PK戦の最後のキッカーを務めた。彼は、ボールを力任せに蹴るふりをしてゴールキーパーを欺き、キーパーが誤って横に飛んだのを確認した瞬間に、チップキックで山なりのボールをゴールに入れた。以後、この芸術的かつ奇抜なテクニックは、「パネンカ」と呼ばれるようになる。極めてリスクが高いプレイを選手が敢えて選択する理由を、ルーは自由意志という観点から説明する。「何ものも欲望とその実現に干渉せず、いかなる障害[...]も欲望をその企てから逸脱させることがないほどに、人間は自由なのである」(p. 42)。ジダンが披露した「パネンカ」

は、ルールによると、自由意志から生まれた「無償の行為」(*Ibid.*)である。パネンカは、失敗のリスクが極めて高い。成功したとしても、普通のシュートと同じく、得点は1点である。ゆえに、その実践は、「主観的な動機」からも、客観的な「必然性」(*Ibid.*)からも要請されることがない。

ルールは、しかしながら、自由という概念を無条件に称賛するのではなく、その内的メカニズムを考察している。「自由」な行為は、あらゆる個別の拘束を免れる一方で、自己を拘束することのない自由に、自己を拘束しなければならない(p. 48)。ジダンのパネンカは、ルールによると、このように極めて矛盾した状態にある自己の行動——自分を決して拘束しないものによって、自分を拘束する行為——から生まれたのである。

こうした深い哲学的な洞察とともに、ルールは議論を進めていく。この書物のハイライトが、ジダンの退場劇であることを疑いえない。延長後半2分、ジダンは、マテラッツィの挑発に報復し、頭突きを見舞った。サッカーのルール上、報復行為は、一発退場である。ジダンの出自(アルジェリア)に対する誹謗を含んだマテラッツィの挑発と、ジダンがワールドカップの決勝を棒に振ってまで行った、家族の名誉を守るための報復行為——試合後、メディアは、両者のどちらに非があるかを検証し続けた。これに対して、ルールは、両者の立場ではなく、スタッドで起きた一つの退場劇を、法哲学的な意味における「合法性(*légalité*)」と「正当性(*légitimité*)」の区別から考察している。

ジダンの退場処分は、サッカーのルール上では、合法である。「ジダンは、罰を免れるはずはない」(p. 134)。かたや、「正当性」は、既存の法制度を超えたところで問題となる道徳と関係している。それでは、サッカーにおける道徳とは何か。国際サッカー連盟は、「フェアプレイ」の精神を掲げている。しかし、ルールが指摘するには、サッカーの正当性は、実際のところ、この「フェアプレイ」というスローガンには還元されない。「他方で、サポーターたちと同じくコラムニストたちも、ピッチ上での悪行を承認

され、ゆえに、祝福された性質のものにしてしまふ何人かの選手たちの常軌を逸した振る舞いを、程度の差こそあれ、いつも評価してきた」(p. 135)。フェアプレイは、建前上では、提唱されている。しかし、ピッチ上で、選手たちは、勝利のために、審判の見えないところで相手選手を挑発し続け、相手の報復に大げさに倒れ、退場劇を演出する。審判(合法性)の視野の外部ならば、マラドーナのように、手でゴールしても国家の英雄になる(*Ibid.*)。サッカーにおける正当性は、極めて非道徳的である。この特殊な正当性を考慮しつつ、ルールはジダンの報復行為に、ある一定の理解を示す。「[...]ジダンは、キャリアのなかで、よく退場処分を受けており(14回)、血の気が多いこともよく伝えられる。しかし、それは、現代サッカーにおいて、欠点であるよりは利点である。この衝動性がなければ、彼は、敵対性に満ち溢れた環境のなかで、彼の才能を妬む敵の選手たちに打ち勝つことも、驚嘆すべきキャリアを送ることもできなかったはずである」(p. 136)。サッカーというスポーツの特殊な「正当性」、つまり合法性を逸脱したものが正当化される事態を考慮に入れるならば、ジダンの報復行為は、合法ではないものの、正当である。ルールは、このショッキングな退場劇から、サッカーというスポーツにおける極めて特殊な道徳を導き出しているのである。ゆえに、彼は、最終章で、「要するに、彼[ジダン]は悪くやってしまったが、悪を犯したわけではない(*En résumé, il a mal fait mais il n'a pas fait le mal*)」(p. 144)と的確な指摘を行う。

ルールの著作は、スタッドの出来事を、哲学の知見から説明している。哲学の難解な諸概念が援用されるものの、書物の内容は、そのものにおいて、決して難解ではない(文体は、エッセーというスタイルを取りながら、時に難解であるが)。ハーフタイムの章(「言語」)では、前半終了のホイッスルとともに、売店や便所に殺到する人々の一群が描写されている(p. 91)。スタッドに足繁く通う者ならば、容易に思い浮かべられる光景である。彼がスタッドの雰囲気をこよなく愛し、そのなかで、この書物が生まれたことは疑いえない。

哲学を専門とする者、サッカーを愛する者、両方に関心がない者——三者が、ある程度において、満足を約束された書物である。

¹ Mathias Roux, *Socrate en crampons*, Paris, Éditions Flammarion, 2010. 引用に際して、ページ数を明記する。

² Christian Bromberger, *Le Match de football. Ethnologie*

d'une passion partisane à Marseille, Naples et Turin, Paris, Éditions de la Maison des sciences de l'homme, coll. « Ethnologie de la France », 1995. ブロンベルジェの仕事

に関しては、『レゾナンス』第3号(2004年)と第4号(2006年)の拙論を参照されたい。